



昭和46年(1971年)

4月号(No. 310)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
山に忘れたパイプを読む	1
富士山の三角点と高さ	2
吾妻スキー行	3
植村、伊藤国際エベレスト隊に	4
医者・医者	4
N・Z便り	5
第二回日本H・K会議	5
東部H・K	6
マカルー遠征の前後	6
熊沢正夫	6
ガルワル西部地図	8
アッサム便り	8
キナバル登頂	8
図書紹介	
マウンテン12号	9
湯の里・白骨	9
図書室便り	
図書受入報告	9
定期刊行物受入報告	9
雑誌	9
二月到着洋書	9
洋書受入報告	9
会務報告	
3月理事評議員会	9
会員異動	10
第2回現地支部長会議案内	10
現地支部長会議実施要項	10
その他	
第268回小集会	11
第269回小集会	11
第7回秩父宮記念学術賞	11

『山に忘れたパイプ』を読む

織内信彦

「永い春の日もすでに蒼茫と暮れかかっていて。池のほとりの雪原をずつと歩いて。峠ともいえない無名の鞍部へと登って来た私達は、太平洋と日本海とに水を分けるこの鞍部の草地に腰をおろして、いまひとたびこの美しい雪に閉ざされた山中の池の印象を心の底に彫りつけようとしていたのだった」

この本の書名ともなった巻頭の随想「山に忘れたパイプ」の見事な書きだしの一節である。著者はいうまでもなく藤島敏男氏。藤島さんは、新緑のしたたる野反池の残雪の畔に腰をおろして一服したあと、愛用のパイプをそこへ置き忘れたまま池をあとにする。そのパイプは著者にとって、あまたの思い出のまつわるファーストパイプであった。

この文章は昭和五年「山と溪谷」第二号に寄稿されたものであって、山好きの学生であった私は、なんという優雅な、そして情趣にあふれる紀行文で

あろうかと、いくたびか繰り返し読んだ記憶がある。いまから四十一年前のことである。日本山岳会には文章家が多い。藤島さんはその中でも屈指の一人であろう。情趣あふれる藤島さんの文章に魅せられた私の山友達の一人が、面識もない年少の一学生であることも忘れて、重々しい建物の日本銀行へ藤島さんを訪ねた。この無遠慮な来訪者を藤島さんは快く迎えて、東北の山や上越の山の話聞かせてやったりし。その学生の名前や顔だちや話しぶりまで、四十年を過ぎたいまでもよく憶えている。藤島さんはそういう人である。

会のなかでは藤島さんというひとくやましかけだけの人のように思われているようだ。しかし実はこの人の体内に流れている山に対する熱情、山を志す後輩への暖い愛情は、最近こそさら筆にされるアイロニーに満ちた毒舌的文章にみられるようなものではない。

い。むしろ本書のハイライトともいえる北越の山や、上越境の山の紀行文に間然するところなくあらわれているばかりか、物故された山の先輩への追憶記などに、しみじみとその人柄がにじみでているように私は思う。

本書に収められている追憶の章は、著者にとっては、師とも父とも仰いで影響を受けた木暮さんをはじめとする先輩故人を追慕する記録であるが、また「困那山の話」のなかに出てくる「失った山仲間」の黒田孝雄、田中管雄、田口一郎といった人達「山をめぐ」のふもと」は秩父宮様御夫妻とのグリンデルワルトでの出会いから御殿場の御生生活を伝える、山の宮様教義の言葉である。いずれも故人に捧げる香り高い著者の、心憎いまでの心の言葉であるといつてよいであろう。

本書に収めるのは、正味六十年に達する著者の山岳遍歴の記録であり、その間主として本会の機関誌「山岳」「会報」に執筆した随想、紀行、追憶、訳章、書評類の集大成である。それから特筆しなければならぬのは、巻末に明治四十五年にはじまり昭和四十四年に至る著者の登山譜が整理されてい

ることである。登山譜にはその山行との同行者が克明に記録されていて、それを見れば、いかに著者が巾広くよき友人をもっていたかがわかるし、そのことは著者の人生を豊かにかつ幸福なるものにした少なからざる要素ではなかったかと推察される。

著者と行を共にした顔ぶれは、会員でない人は別として、どの年代をとっても、山岳会の伝統を受けつぎ伝えることに大なり小なりならぬ役割を果たしてきた名前を多く見かける。このことは著者自身が、山岳会のよき伝統の流れのなかに絶えず生き続けていこうとしているひとつの現われとみて間違いないではあるまい。

藤島さんくらしいわゆる衆愚といったものを嫌ひ、これと妥協しない人も珍しい。もともと日本山岳会には、表現は適当でないにしても、そういう伝統があったのではないか。本書五六〇頁を一貫して流れているものは、低俗を忌み、便乗を排し、迎合と妥協しない藤島さん一流のエスプリである。この本を読んで、そのような伝統的な山岳会の気風に、昨今いささか乱れといったようなものが起っているのではないかと気にかけている私はそれが私の

思い過ごしてなければよいが、とあらためて感じたのであった。

この登山譜を見て、著者の足跡がいかに広く、また山行回数のいかに多いかに一驚しないものもあるまい。著者は本書のどこかで、学生時代山岳部にあって山登りに明け暮れた者が、あれは若気の過ちとばかりいつとはなしに山から遠ざかってしまふ、といった嘆いている。それに比べると著者自身は明治二十九年生れだから本年七十四歳の今日でも、まことに飽くことなく山登りを続けている。こんなことは西洋へ行けばさらにみられることさ、と著者はこともなげにいつてのけるだろうが実際にはなかなかできないことだ。

この時の観測は、関東大震災の復旧測量の一環として行なわれたもので、まず明治二十三年に埋石された白山の三等三角点を改測して『二等三角点富士白山』として改測された。標高は、山麓の約一四〇〇m付近にある電ケ馬場(二等三角点、高丸尾(二等三角点)のいずれも近くの二等水準点から直接水準測量によって標高を求めた高さの精度の良い点と点として、三等経緯儀による間接水準測量によって求められた。それと同時に剣ヶ峰にはじめて新設された三角点が先に述べた『二等三角点富士山』である。この三角点の標高は、二等三角点富士白山および南麓の三等三角点野村猿と点として決定されている。この時の模様は山岳第二十五年第一号に掲載されている昭和五年に陸地測量部から出された『富士山の標高に就いて』の文書に詳しい。(付図参照)

点の記には「頂上の最高は標石の北方約10mの岩にして標石より高さこと〇・一五mなり」と書かれていて標石の上面と最高点の高さとを一致させることはできなかった。この時に決定された標高は三七七・六・二九mで、この値は昭和三年第二回修正測図昭和五年五月発行の五万分一地形図から用いられている。

剣ヶ峰にある現在の二等三角点富士山は、昭和三十七年九月に低下改測され標高は三七七・五・六三mとなった。風雪にさらされて標石が露出してしまったので改測のみで改測は行なわれていない。低下改測に当っては三七七・五・〇mを下らないよう石を積み上げコンクリートを練って補強し大変苦勞をした由である。

二等三角点富士白山も同じく岩石の崩壊による標石の露出は避けられず、昭和三十九年九月に〇・四二m低下改

埋し、現在の標高は三七七・六・三六mとなった。この時も改測のみで改測は行なわれていない。

二等三角点富士山の精度は、観測の条件からいって、二等三角点富士白山の精度にかかっているといえるが、独立高峰上にあるこの日本一の高さの三角点は、他の一般の三角点に比べてその観測のためには特別に注意が払われている。それ故に、観測のためにいろいろな悪条件があるにもかかわらず、他の三角点に比べて特に精度が劣るといことはない。

一般に三角点の位置や高さの精度はその三角点のある場所や、観測の条件などのさまざまな理由によって異なり、一概にはいえないが、日本の三角点の高さの精度は大方十〜十五cmくらいであるといわれている。悪条件の重さなつたような場所では数十cm程度のものもあり得るが隣接する三角点相互の関係では一般に良い値が得られている。

三角点の精度の問題はさまざまと誤解をまねく恐れもありむずかしい。高山の標高測定の問題点については『自然』という雑誌に国土地理院地部長の井上英二先生が書かれた『エベレストの高さ』の中に大変親切的な説明があるので、これを参照していただきたい。この中でも述べられているように、高山では、特に富士山のような独立峰では気流が乱れることが多く、空気密度が様でないわけ、光の屈折による測定誤差も一般に比べて大きく現われる。また、与点に用いる三角点までの距離も、エベレストの測量のように数十kmもの遠方の与点を用いた前方交会法などとは比較にならないまでも、普通よりはやや遠く、富士白山から与点の三角点までは七・八km、比高にして約二五〇〇mである。

三角点の標高は、一等点から三等点まですべて同様に三等三角測量のとき

に観測されるが、水準点に近い三角点のうち何点かを測標水準測量で求め、その高さをもととして間接水準測量によって求められる。また、ご存知のように一等三角点本点間の距離は四十〜六〇km、補点を含めた一等三角点間の距離は二十km前後、三等以上のすべての三角点の配点距離は約三kmである。

日本の一等三角測量は、昨年から第三回目の測量に入っているが、明治十六年から大正四年の間に完成された第一回の一等三角測量の精度は、諸外国のそれと比べてもおおく劣るものではなく、そのころに既に欧米の一流国なみのものであった。この時の成果、(明治成果・旧成果)が実用成果として現在も用いられているものである。

戦後の一等三角測量は、南海道大地震のあと再開され昭和四十二年に完成された。この測量では、要所に天文測量によって方位角と経度を求めた三角点(ラプラス点)および天文緯度を求めた三角点(ポット点)を設定して誤差の累積による三角網のネジレを修正した。この新成果(昭和成果)に基づいて、二、三等以下の三角点は改算されたが、この新成果はいわば研究成果に止まっていた実用には供されていない。二、三等三角点は設置以来戦前戦後を通じて地震の被災地域や地盤変動の生じた地域が必要に応じて改測(明治成果に基づいて計算される)されているのみで、全国的な再測量は行なわれていない。ただ富士山の三角点のように、標石が露出してしまったり、破損したり無くなってしまったたり、破損したり無くなってしまったたりしたものは復旧されていった。最近ではコンクリートに丸い真鍮の金属標をはめ込んだ標識が使われているものもある。

また最近では人工衛星を使った三角測量も行なわれていて、日本でも千葉県鹿野山測地観測所から札幌までの基線測量も終り、鹿野山、札幌、鹿児島、八丈島などで人工衛星の同時観測を行ない、これらの地点を結ぶ大きな三角測量がはじめられている。このように新しい三角測量が行なわれても今のところ明治成果が実用成果として用いられることに変わりはなく、富士山頂にある二点の三角点を改測する計画もない。

また、富士山での重力の測量は、明治のはじめにメンデンホール、チャレン、田中館などによって個人的に行なわれた記録があるだけで、その後はまだ測定されていないことを付記しておく。

参考として使用した資料は次のとおりである。

- 1、高木菊三郎著「日本地図測量小史」東京古今書院(昭和六年)
- 2、高木菊三郎著「日本における地図測量の発達に関する研究」風間書房(昭和四十二年)
- 3、陸地測量部編「陸地測量部沿革史」
- 4、建設省国土地理院発行「測量・地図百年史」
- 5、「山岳」第二十五年第一号
- 6、「自然」第二十五卷第九号(一九七〇年九月号)
- 7、地形図

この稿を書くに当りましては、国土地理院測地部計画課の高嶋技官他の方々へ貴重な情報・資料を提供していただき、ご指導いただきましたことを厚く感謝いたします。

(46・3)

吾妻スキー行(婦人懇談会)

山口 節子

二月二十、二十一日を登高会のスキー行に便乗させていただき、吾妻へでかけた。十九日夜半辰沼医院前を貸切バスで出発。登高会の偉い先生方が大ぜい参加されて、現役の学生さんがま

るで小さく見える。

翌朝小雪と風の中を高湯安倍旅館着朝食小憩後シルをつけて慶応吾妻小屋を目指した。十年前とは大変な違いでリフトを四本乗りつぎ、歩きは賽の河原から上である。陽が射して風も静かになったが、シルなしの方はラッセルが大変だったようだ。お屋敷林の中のしゃれたヒュッテに着いた。赤いのがった三角屋根の、発電設備のあるすばらしい小屋だ。夕方まで小さな斜面をならしてグレンデを作り、でんでにたびおたり、雪の中でもおたり。夕食はストロブを囲んで濁り酒や国産、スコッチとりまぜた瓶が盛大に立ち並び、大先生方はすっかり打ちとられて安らかに眠ってしまった。

翌二十一日は快晴無風、蔵王、朝日連峰を眺めながら家形山に三々五々登る。私たちが藤井さんと昨夜いらした福島支部の伊藤さんなど七、八人で直下のコルまで登り、新雪にめいめいシニールと大穴を叩いてシルハイルを叫んだ。二月には珍しい春山のようなのどけさで私たちのほかに誰もいない。雪崩で潰された家形ヒュッテの前でパイザをあける。

静かな林の中の滑走はたちまち終わってグレンデに入ると、日曜だからかなりの人出だ。グレンデに未練はないからそのまま高湯へ直滑降して、お子さま連れなので下で待ついらした宮下さん、小倉夫妻に再会した。

登高会の皆さんの折角の催しにもぐり込んだので、ちょっと申しわけないような気持だったが辰沼ドクター、丹部さんをはじめJACのメンバーが大ぜいいらっしやと、成瀬さん、松本さん、藤井さんらも参加されて本当に楽しい快適なスキー行をさせていただいた。

(婦人部参加者小原、増田、小倉、三枝、北島、山口)

植村、伊藤両隊員 国際工峰隊に参加

本会では毎日新聞社、日本放送協会の協力を得て、国際エベレスト登山隊（隊長デイレンファース氏）に会員植村直己、伊藤礼造両氏を隊員として派遣することに決定した。国際エベレスト登山隊は、十二カ国のクライマー三十人（うち女性一人）で編成、昨年本会エベレスト登山隊が八〇五〇mで断念した南西壁の直登を中心としてエベレストに挑戦する。

国際隊は二月二十八日、二十人のシエルバ、三百五十人のポーターとともにカトマンズを出発、三月二十三日ベイスキャンプに到着、四月中旬から五月下旬にかけて西壁と南西壁の二隊に分かれて行動する。

植村直己隊員（二九）は一九六九年春、秋の二回の日本山岳会エベレスト偵察隊に続き七〇年春の本隊に参加、松浦隊員とともに東南稜から登頂に成功したほか、五大大陸の最高峰をすべてきわめている。また伊藤礼造隊員（二四）は七〇年春の本会エベレスト隊に参加、南壁要員として活躍したクライマーで、今回の国際隊では最年少隊員である。二人は二月十四日羽田を出発

しカトマンズで本隊と合流した。植村、伊藤のほかの隊員の氏名は次の通りである。

Norman G. Dyhrenfurth (32) U.S.A.

フンピア大学助教授、五二年スイス・エベレスト隊、五五年国際ヒマラヤ隊、五八年雪男探検隊、六〇年スイス・ダウラギリ隊、六三年米国エベレスト隊長。

Wolfgang Axi (35) Austria
学校教師、西稜隊リーダー。
H.V. Bahuguna (32) India
インド陸軍大尉、六五年インドエベレスト隊。

F. Duane Blume (37) U.S.A.

高所心理学者、酸素担当。
John Cleare (34) G.B.
写真技師。
Gary Collier (28) U.S.A.
生物学者

Odd Eliassen (26) Norway
大工、トロロゲン初登。チベ・ダランデ・デ・ラ・バングなど登攀。
John P. Evans (32) U.S.A.
地理学者、エレクトロニクス技師。

Dougal Haston (29) G.B.
国際登山学校教師。六六年三月アイガー北壁直登七〇年アンナプルナ北峰
Toni Hiebeler (40) W.Germany
アルピニスム誌編集者、冬期アルプス三大北壁登攀者。

言つけ加えしおく。
The Fabulous Flemings of
Kathmandu by Grace Nies
Fletcher
一九六五年版だから新刊とはいえないが、タンセンの岩村昇ドクターなどの仕事はそのフレンジン夫妻が、始めた診療事業の一翼を担っているのだという意味で、創始者夫妻がネパールに腰をすえる至った物語を読むことは大いに興味のあることだ。今年には伊藤邦幸君の一家が東の方のオカールドゥン

に乘坐び年でもある。われわれの知人がだんだんこうしてネパールの土地にどっかりと坐りこんで、落着いて土地の人々のために力を尽すことになって行くということは何とも嬉しいことでもあり、そうなるという何の役にもたぬぼく達は、ただの応援団にならざるを得ないのだが、それでも応援し甲斐の人がいるとは何としても有難いことには相異なる。

伊藤君一家の健在を祈らざるを得ない。

（松方三郎）

国際エベレスト隊の中にピーター・ステイルの名が見える。隊つきのドクターだが、足跡の広いことと万能選手タレントという点では珍しい人物だと思ふ。一九三五年生れだから今年三十六、植村君の通信でも、彼がキャラパンの途中で、巧みなネパール語で村々の病人をみていることが出ているがネパールとブータンとで診療を兼ねた奥地旅行をやっているから、大いにその経験を生かしていることだと思ふ。

医 者・医 者・医 者

Two and Two Halves to Bhutan
はここから出ているのである。子供二人といっただけでこんなチビだから、まことに念が入っている。

ステイルはお医者だから専ら病人をみている。（ブータンにはネパールの山手のように甲狀腺肥大症が多い）。子供にとってはブータンもへちまもあつたものではない。ことにラブラドルで一年半前に貰ったばかりという下

日本では中尾君の「秘境ブータン」（一九五七）小方君の「ブータン素描」（一九六九）のほか外交官の東郷さんの「ヒマラヤの王国ブータン」（一九六五）がある。それぞれに貴重なものだが、ステイルの近著は大いに異色のあるものだといえると思う。

ブータンについてはP.P.Karanという人の本が出ていたが、ぼくはまだ見ていない。ケンタキー大学の出版局の発行となっている。

Jan. F. Howell (34) G.B.
テング音響技師。
Ned Kelly (36) G.B.
カメラマン。
David Isles (35) U.S.A.
タフト大学教授。
Carlo Mauri (40) Italy
報道カメラマン、ラーニ世号乗組。
Pierre Mazeaud (41) France
フランス国会議員、六一年三月マターホルン北壁登攀。
J. David Peterson (28) U.S.A.
高所心理学者、ワイオミングのペヤン・ガイ。
James O.M. Roberts (54) G.B.
退役中佐、カトマンズ・ペヤン・タフト社社長。
Leo Schlömer (33) Austria
オーストリア陸軍のペヤン・ガイ兼インストラクター。
Peter R. Steele (35) G.B.
外科医。
Ian Stuart (38) G.B.
テレビカメラマン。
Jerzy Surdel (35) Poland.
映画、テレビ・ディレクター。
Jon Teigland (26) Norway
経済学学生。
Antony Thomas (30) G.B.
テレビ・プロデューサー、俳優。
Michel Vaucher (34) Swiss.
数学教師、ガイド、ダウラギリ主峰
Yvette Vaucher (34) Swiss.
バランシェーター。六五年マッターホルン北壁、ミッシェル夫人。
Don Williams (37) G.B.
王立地学協会会員。五四年ペ・ドリーニ南西壁、モンブラン・フレネー岩塔、チベ・グラランデ直登、六七年マッシャーブルム、六三年ゴリーランカール、七〇年アンナプルナ南壁。
Phatte Bahadur Limbu, Nepal
Hartha Bahadur Gurung, Nepal

会費は会の血液、よろしく願います。



晩餐会
スナップ 45・12

遅まきだが珍しい顔ぶれが見えるので紹介出としてご紹介する。右は会員羽田栄治氏撮影、マライニ氏の挨拶、望月、渡辺、松方の三氏の他に加納、郎氏など。左は吉沢撮影、元老二人は毎年撮っているが少しも変わったところがない。目出度し。



◆N・Z便り◆

福岡山の会々長
久留米大学教授
脇坂順一

二五日にN・Zに到着手始めにタズマン氷河の奥にあるホスタタター・ドーム、アイルマール並びにエリ・ド・ボーモンの三山に登頂。昨二月三〇日にクックに無事登りました。

これまで随分山にも登りましたが、この山ほどスリルに富んだ、というよりも危険極まりない山はありませんでした。頂上直下二五〇mは四〇六〇度の急峻な氷壁、勿論下りの方が危ない訳。プラトニー小屋から往復一五時間、緊張の連続。

今年には二人の孫が出来て、新たに(N・Z)にお爺(C・Z)さんになったことにかこつけて憧れのクックに挑むべく、N・Zへ来た次第です。五七歳の初老の年輩で登ったことに、ガイド

正月の六、七日ごろオークランドへ参り。ご紹介頂いたヒラリー卿に会うつもりです。その前にエグモントに登る予定です。

七〇年二月三十一日

ハーミティジにて

吉沢一郎様

Ⅱ第2回日本N・K会議Ⅱ

吉沢一郎

H・K会議(われわれはこれをH・K・Tはタングと略称している)も二回になった。第一回は裏磐梯で行なわれ約九〇名の出席者をみたが、今度は一七〇名となる。好きな人は一万円に近い自腹でもよく集まるものである。

日時 昭和四十六年二月二〇日(土)及び二一日(日)
場所 岐阜県大垣市、レストハウス大垣
第一日
受付 九時半
開会式 一〇時半
開会の辞 あいさつ
歓迎の言葉 吉沢一郎
趣旨説明 井上孝二
自己紹介 田中栄蔵
記念講演 一一時一〇分 全 員
・学術と探検・H・Kをテーマにして
京大教授 吉井良三
・空からのアフガン 屋敷と記念撮影
阪大名譽教授
水野祥太郎
・H・Kの自然 バネル討議 一三時
・H・Kの自然 田中栄蔵
司会 高木泰夫
植物 有田 豊
昆虫 松本征夫
地質 宮森常雄
小山 貢
・H・Kの人 司会 深田久弥
言語 津田文夫
宗教 湯浅道男
N・ムハマド 藤井 洋
近代化 向後元彦
中馬敏隆
・登山 司会 吉沢一郎
中部 増永勉夫
ワガン 土石川勝司
H・R 雁部貞夫
スワット 宮森常雄
新貝 勲



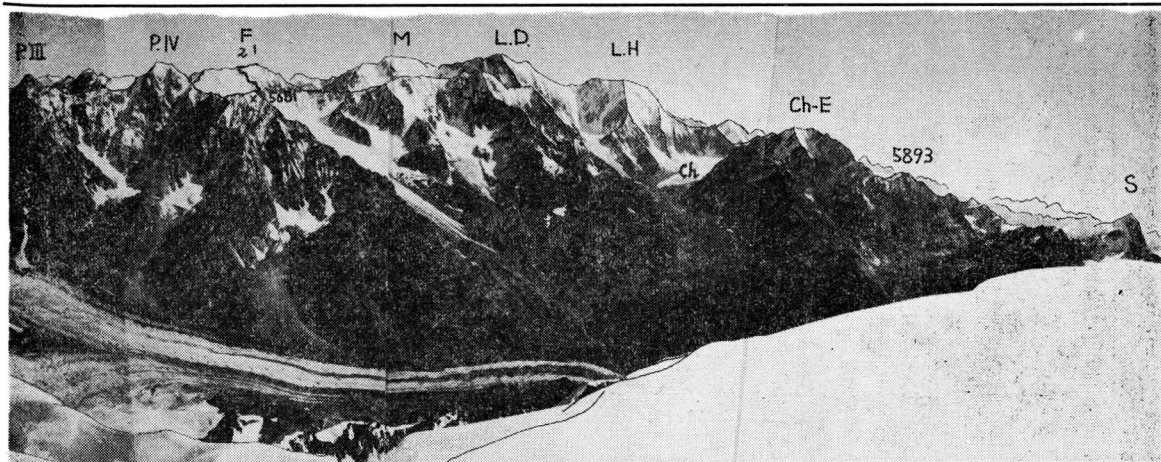
・特別講話 山岳随想 岐阜大学長 今西錦司
閉会式 一五時
あいさつ 深田久弥
閉会の言葉 高木碯男
・特別講話 山岳随想 岐阜大学長 今西錦司
閉会式 一五時
あいさつ 深田久弥
閉会の言葉 高木碯男

今回の会議が盛會裡に終ったことは地元のお役所や大垣山岳協会の全面的な御支援の賜ものであったが、お忙しいところを枉げて出席して下さい、今西錦司、水野祥太郎、吉井良三の各教授の御好意によることも多い。

尚、登山隊がいつもお世話になってるアフガンのナジブラ・ムハマド氏に対しても深く感謝の意を表したい。第三回は増永勉夫君にお願いして、福井市で一二月に開催されることに決定した。よろしく願います。

当日のH・K・Tの諸問題 田中栄蔵
映画 京都カラコルム辺地教育調査隊リセプション 一八時半
歓迎の言葉 大垣市長 深田久弥
第一日を予定通り終って全員「養老館」に投宿。深更に及ぶまで懇親の実をあげる。

第二日
七〇年度登山報告 八時四〇分
司会 田中栄蔵
中京、名城大、蒲郡、滋賀、槍ヶ岳山荘、長崎大、秋田、千葉工大、慶応大、横浜三稜会、同人登勢嶺、雲表、アベニン、岐阜
・七一年、七二年登山計画発表
・屋敷
・特別講演 一三時
山論 田中栄蔵
H・K探検史 深田久弥
一九七〇年度外国隊の活動 吉沢一郎



D 東部H・K 一、横浜三稜会

(危うくつけ落ちになる
ところであった。これ
でH・Kは本当の終
り。編者、I・Y)

隊員 柳島三樹(隊長、
26)、齋藤延雄(22)、
小林恒子(23)、野地緑
(22)。

活動区域 東部H・K、ウ
ズヌー谷上流、コトガ
ズ氷河南北岸。

登山活動 羽田(68)
カラチ、ラウルピンデ
イ、チトラル(628-
73)、BC(コトガス
氷河、四〇〇六m)、
C1(714、四三六六
m)、C2(716、ノゴ
ール峰北西稜上、ビ
パーク(頂下一〇〇〇)
ノゴール峰登頂(五九
三五m、726、柳島、
齋藤)。

ベギッシュニ峰(六一
六七m)AC(731、
四七八〇m、南岩稜)
全員登頂(81、
BC撤収(86)、チト
ラル(814)。

写真説明・横浜三稜会隊
がノゴール峰から撮った
もの。同定は吉沢がやっ
たので誤りあれば私の責
任である。

・PI、ベギッシュ・ゾム
I峰(六二六九m)。
・PII、同II峰(六一六
七m)。
・PIII、同III峰、高度、

東海支部マカルー遠征の前後

熊沢正夫

因縁の始まり

五年ほど前のある日、大学の研究室
に日本山岳会東海支部員と名乗る若者
の来訪を受けた。用向きは翌年度から
東海支部長を引受けよと言いつつはな
る。年が経過するに従い、いつとはな
しに色々の引掛かりができて自分の生
活にあわだちさが増してきていたの
でそれを少しでも逃れようと思った。

それで近來山の方は御無沙汰だし東
海支部に親しみがなく様子も知らない
からとか、日本の山岳会の会員でもな
いからと、逃げ口上は一応弁じたわけ
である。しかし相手方は事前に検討し
ていたらしく、若気の至りで昔書いた
私の山の本のことや、前には山岳会に
入っていたことなど調べているし、ど
こかにあれを出したらどうだと尻おし
する人もあるらしい様子で、素直には
引き返さぬと説き取りざるを得なかつ
た。結局「利用価値のない支部長と予
め承知しておいて呉れ」と言うくらい
の憎まれ口をたたいたとは思いますが、
それでも私としては割合に素直に若者の
希望を内諾してしまつた。

世間普通のことだが、私も今までに
数え切れないほど生命保険の勧誘員に
訪問された。私はその都度玄関先に突
立って言うた「生命保険には今まで一
回も入ったことがないし、これからも
入る気はない。その私を加入させるや
うに君が説得すると言ふなら、一つや
つて見なさい」とするなどの勧誘員
もちゃつとためらつた末「では今後御
縁がありましたら是非我社へどうぞ」
とか何とか言つて帰って行く。

ところが今回の件についてはそんな

態度はとれなかった。もともと自分自
身特別な登山歴はないながら山が好き
だったことや、損得かまわずひたむき
に山を愛しこれに登ろうとする若者の
心情に今でも惹きつけられる弱点がこ
ちら側にもあった。更に又山について
特別の興味も経験もない私の妻は、宅
に出入りして接触する老若の知人のう
ち、山岳関係の人の人柄に妙に一番好
感を持っている様子である。私が東海
支部員の要求に案外素直だったのはこ
んな背景の反映だったに違いない。

私は昭和の初期には日本山岳会に入
っていたが、地方に住むようになって
いつとはなく会費滞納で除名になつて
いた。従つて止むなく漢々何千円かの
入会金を払つて会員に復活し、昭和四
十二年度から形式上東海支部長に選任
されたわけである。

後から察すると、東海支部では四十
一年初めアコンカグア遠征をやり遂げ
て帰国した後、内部に何やらゴタゴタ
が起り、一部にはこれを処理して陣容
を建てなおし、ヒマラヤ遠征に向う計
画があつたらしい。従つて本人の私自
身当時一向知らなかったが、マカルー
I遠征と私との若干の関係は好む好ま
ないに拘わらず、既に支部長を内諾し
たその時点から計画的に運命づけられ
ていたと言える。

マカルー計画の成熟

実はそのマカルー計画はいつ頃から
誰を中心として考え始められたのか、
東海支部と関係のなかった私は直接に
は何も知らない。しかし昭和四十三年
初めネパール政府の登山解禁予告が伝
わると共に委員会が作られ、翌年実施

を期するマカルー計画が早速支部総会
に正式提案可決されたことを考えると
既に計画が相当熟していたらしい。

その委員会の長は支部長が兼ねると
言うことで、ここから私はマカルー遠
征と實際上の関連が始まつた。ところが
この計画はネパール政府の解禁実施
の期日が決定しないために一先づ断念
され、それに代つてこの時期に五人か
ら成る偵察隊を送りマカルー偵察を兼
ねてネパール政府に対し四十五年プレ
モンズーンにおける本隊の登山許可を
促すことになつた。

偵察隊長はネパール政府と特有の粘
り強さで執拗に交渉を重ね、遂に解禁
を実施させ、東海支部の計画に対する
公式の登山許可書第一号を入手すると
共に、いち早く優秀なシエルバの雇用
契約を結んで、四十四年六月に帰国し
た。

これと同時に支部は必死の準備作業
に沸き立ち活気にあふれた。装備や登
攀技術面は海外登山研究会と呼ぶ下部
組織の人達が頻りに会合して研究を重
ねた。ただし私自身はほとんどこれに
は顔を出さなかつた。

九月からは募金活動と共に必要装備
の発注、調達を手分けして始められ、
その間に装備のテストその他の目的で
の合宿訓練も行なわれた。この時点で
は目前に実現が迫つた遠征と言う現実
的な目標の魅力のためであつたが、見
ているとほんとと感心するぐらい実に
日夜を問わず一団となつて全員が動い
た。

しかしこの過程で自発的に又は故障
のためにグループから離脱する者や、
不適格として疎外された者があつた反
面、従来支部に関係がなくても実力と
熱意を買われて呼び入れられた者もあ
つた。遠征隊員は委員会が検討し、隊
長が最後決定を下すことになつていた
ものの、実際は前記の経過中に各自の

この遠征隊は見事だったと考える。たとえ登頂そのものの成否を度外視しても……。

この点の第一はチーム作り、つまり隊員の組合せが巧くできたことである。国内の準備段階では、各自が登頂と言うそれぞれの目標を共通に持つ者の集合であるから事が運び易い。しかし現地での隊の行動が進展するとうはいかない。この種の大規模のしかも困難な遠征となると、隊としての登頂成功が唯一の目標となり、各自の目標は棄却され、隊そのものも目標達成のために献身しなければならなくなる。この段階で隊員間に種々の形のトラブルの起き起こすことは、特に大きな遠征隊にその実例が見られている。

トラブルの根源は前記のような一種の抑圧感にあるが、そのトラブルを一層深刻化させるものは長く続く困難な状況下におかれると、普段ならある程度教養のべールで被覆されていた各人の本性がそのまま暴露され、更にまた一種の異常心理も働かれ、幹部の隊員管理能力の不足の点にあるものと思われる。

しかしマカルー隊には余り極端な本性を暴露した者は含まれていなかったらしいこと、ベースキャンプに達することのできなかった隊長に代って、指揮をとったリーダーの、隊員とシエルバに対する管理統制が優れていたことは、遠征成功の第一の基盤であったと言えよう。

私が現地で見えていないから、そんな事を言うが、実状はそう無難な隊員や忠実有能なシエルバばかりではなく、色々な形のトラブルも多くて、苦労したと彼は言うかも知れない。しかしそれも程度問題であり、間接の情報からも、また帰国後の隊員達の言動の上から見て、私の推察は間違いないと信じている。

勿論現地で指揮を担当したリーダーが一匹狼であつたらことが順調に運ぶ筈がない。実際には少数ながらそれぞれ特長の違う腹心がいて、忠実に各分担の事項を終始遂行し、同時に相互に密着していたのである。つまり隊の中核分子数名の長短相補う強い組合せが準備段階から最後まで維持されたことが、現実として遠征の成功の基礎となったことは疑いない。

その反面それらの男の苦労の程は、彼等が下山後、早く一人だけになったとか、この次には二、三人だけでのんびりとヒマラヤを歩きたいとか、遠征は今回だけで沢山とかの私語を漏らしたことから判る。この私語は少々割引して受け取るべきかも知れないがその当時としては相当の実感であつたろう。また自らは七〇〇〇mの地も踏まずに少数の隊員をして頂上に立たせる役割を果たした男の悲痛な内心の告白とも見られようか。

八〇〇〇mを越えるヒマラヤの峰々は今よりもな、何等かの犠牲を要求せずにその肌を許すものではない。しかし隊員は言うに及ばず、ポーター一人の生命をも捧げずに、マカルー隊が所期の記録を作り得たことによる爽やかな気分だけは、すべての関係者に共通するものであろう。

(名大名誉教授・日本山岳会東海支部長・マカルー学術遠征隊総指揮)

ガルワル西部地図

(一五万分一)

スイス山岳財団の東部と対をなすもので、写真版(6枚現寸と同じ)にした。詳しくは左記にお問い合わせ下さい。ルームに展示中。

大阪市西区土佐堀通五一五八、倉橋運輸会社内 吉永定雄。一部二四〇〇円(要前金)。十枚まとめるのと若干安い。扱い期間五月中旬まで。

◆アッサム便り◆

静大山岳会 Churen Himal
遠行隊登攀隊長
山 本 良 三

前略、御無沙汰致しております。既にチューレン・ヒマールのニュースは先に帰国致しました隊員などからお聞きいただけたものと思っております。

BCからの連絡の手落ちのために(リエゾン・オフィサーの失策)AP電が「Churen Himalの初登頂は、Shepa 一人」などと誤報を流したために、多少不審に思われたことと存じます。

しかしカトマンズ帰着後、ロイター電の記者に話した正確なニュースが、11月10日の朝日に出ていたのをカルカッタのホテルで読みました。

その後も大石淳(JAC会員)君とでアッサムにやってきました。何とかして特別許可を取りつけようとしておりましたが、なかなか進展していません。この分だと年を越してしまうのではないかと、多少気をもんでおります。

既にアッサムに来てから二〇日を過ぎ、予定より大巾に遅れております。しかし Assam Mountaineering Association には「アッサム・タクト」することに成功しました。

また Kangro (7689m) などの写真撮影も可なり満足すべきものでした。何とかして Namcha Barwa 峰 (7766m) の写真をとろうと思って

ブラマプトラ河上流の Lakinpur というところまで行きましたが、遙か遠い山波の彼方に白い雪の峰がいくつも見えるのですが遠近感が定かでないために、どれがナムチャバルワか確認できませんでした。

しかし一つかなり顕著な白い頭があり、方角が合致しているので、あるいはそうなのかも知れません。

入手するしインナー・ライン許可を入手することが出来たら、より正確な写真をとることが出来るものと思っています。

帰国が多少遅れますが、今年一杯は許可取付けに当地にいるつもりです。いずれ帰国致しますれば詳しい報告を致します。

昭和四五年二月二〇日

Shilong, Meghalaya (吉沢一郎宛)

◆一九七〇年のワンドイ◆

—京都山岳会—

拝啓、お元気のことと存じます。

出発前にはいろいろとご教示いただき有難うございました。さて五月中旬頃から登山にかかりましたが、五月末ご存じのように大地震に遭いました。

一行七名は三名ワスカラン、四名ワンドイに分れて行動しており、ワスカランは五月二十六日南峰登頂、当日はBCを撤収して下山の途中で、比較的安全な場所におりました。

ワンドイ隊はルートワークを続けておりましたが、当日は二名がたまたまルートワークの途中で引返し、他の二名は、その前に転落死したチエコ隊員のための遭難碑をチエコ隊と共に作っており、当日の朝、チエコ隊と別れてキャンプに戻ってきたところでした。

という訳で私達全員が無事であったのは実に好運でした。地震がもう一日あとに起きていたら、私達はワスカランからワンドイに向うはずでしたし、半数以上はやられたでしょうし、チエコ隊は、ワスカランのノーマル・ルートに向うことになってい

たので、半数以上は助かったでしょう。

六月には連絡のため下山したり、雪崩で堰きとめられて増水していたヤンガスコ湖の運河掘りや、チエコ隊の遺体、遺品の搜索などで登山は出来ませんでした。七月のはじめ、残った装備(相当の装備が流失、盗難にあいました)でワンドイ南峰南バットレス・ルートからの初登攀が果せました。

あの条件の下では最大の成果であると考えています。後ほどもっと詳しく報告できると幸いです。

同封したのはモラレス氏から送られてきたもので、今年度ベール・アデス登山のあらましです。ご参考にして頂ければ幸いです。草々

十月七日

高橋喜一

◆キナバル登頂◆

この間神戸の西村清一郎君から古い新聞記事のリコピーが送られてきた。朝日新聞昭和18年4月4日の朝刊で、「雲海の上で祈る武進」ボルネオ最高峰キナバル山頂を征服」という見出しのものであった。

それによると、陸軍少尉山口隆一氏(神戸市出身)ら一五名が、昭和17年(一九四二年)10月5日、遂にキナバル山頂に高く日章旗を掲揚し、日本人登山の新記録を樹立した、とある。

ルートその他こまごまと書いてあるが行ったことのある人なら成程とうなずけよう。因みに山口少尉は神戸一中から同志社大学に入り、京阪電鉄に入社し、昭和16年応召という。

(吉沢)

図 書 紹 介

Mountain No. 12, Nov. '70

最近本会 Library Exchange をはじめた英国ユースホステル協会編集の登山専門誌である。

近着の12号をみると一九七〇年度のヒマラヤ登山を特集しており極めてレベルの高い内容であることがわかる。12号の内容を紹介してみると、巻頭に Information と題して一九七〇年度のアルプスをはじめとする英国の国内、外の記録が網羅されている。日本隊が開拓したアイガーの直登ルートも Japanese Route とし今夏、ハンス・ベルガーとハンス・ミューラーによって四日間で昨冬の第二登について第三登がなされていることが記録されている。

ヒマラヤ特集の記事の中でも特にアンナプルナ南壁の記事は大きく扱われており、写真による登攀ルートの説明で南壁の様子が克明に記録されている。また本誌に掲載されている広告の多くのものに、『アンナプルナ南壁登攀』という活字が見られるのを見て、この登攀にかけていた英国登山界の期待の大きさをはかり知ることができる。

他にナンガバルバットのルバル・フランケ登攀記録、オーストリア隊のローツェンシュアルの記録がみられる。またトム・フロストの「テクニカル・クライマーは果してヒマラヤで幸福を見つけることができるか」という記事も興味深い。デヴ・ペアースによる Equipment Note—アンナプルナでの教訓も参考になる。(A・M)

発行所—Mountain Magazines Ltd, 102a Westbourne Grove, London W2.

年間購読料—海外・送料共四・五米ドル

湯の里・白骨

横山篤美著

横山篤美氏には上高地の開拓史に関するまじめな著述が数点ある。いずれも地元の方ならではの手がたい史料収集の上に立った労作ばかり。この横山氏が今回はその対象を乗鞍岳山麓の白骨温泉に向けて、その名も『乗鞍山麓・湯の里白骨』なる一著をものされた。

これは白骨温泉の歴史的な由来を古文書や古い資料にもとづいて浮き彫りされた労作である。

ここには正しい郷土の姿を後の世に残さんとされる横山氏の心の高まりなどもうかがわれて、私など敬服するばかり、非力な私には興奮の書でもある。

横山篤美同人刊、B 6 版一六二ページ 三百円

図書室便り

(昭和46・2)

図書受入報告

北国出版社寄贈

(1) 広瀬誠著『立山と白山—その歴史・伝説・文学』昭和46

三浦光江氏寄贈

(1) 『三浦義明遺稿集』昭和46

広羽清氏寄贈

(1) 毎日新聞社編『日本の名山』昭和46

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕

(1) ヘルニナ山岳会『Bernina』No. 17

(47-1)

(2) 福島県山岳連盟『福島山岳』No. 4

(45-12)

(3) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 45

(46-2)

(4) 日本山岳会東海支部『海外登山研究

会資料 II III (44, 45)

(5) 京都山岳会『京都山岳』No. 550

(40-2)

(6) 『名古屋山岳会月報』No. 24 (46-1)

(7) 東京野歩路会『山嶺』No. 490 (46-2)

(8) 日本自然保護協会『自然保護』

No. 103 (45-12)

(9) 低山を歩く会『低山』No. 64-66

(45-10-12)

(10) 『登歩溪流会会報』70-9/10

(11) 日本山岳協会『登山月報』No. 23

(46-2)

(12) 横濱山岳会『山』No. 463 (46-1)

(13) 日本登山協会『山と雪』No. 154

(46-2)

(14) 日本登山学校『雪と岩』No. 24

(46-1)

〔雑誌〕

(1) 『アルプ』No. 156 (46-2)

(2) 『地図』No. 32 (45-12)

(3) 『岳人』No. 285 (46-3)

(4) 『HIKER』No. 185 (46-3)

(5) 『山と溪谷』No. 390 (46-3)

〔報告書〕

(1) 女子登山クラブ『アンナプルナ日本

女子登山隊報告書』70-10

(2) 西村清一郎著『厳冬のチトラー

ヒンドゥ・ラジール遠征資料集』88

1-12 (69-3) (西村氏寄贈)

(3) 東京アンナプルナ会『アンナプルナ

サウスピーク登山計画書』70

Journals Arrived in

February 1971

1. "Die Alpen", No. 1, Januar

1971.

2. "Alpinismus", 1971-1.

3. "Appalachia", Vol. 38, No. 2,

December 1970.

4. "Appalachian bulletin", Vol.

36, No. 12, December 1970.

5. "Chicago Mountaineering

Club, "The Newsletter", Vol.

24, No. 1-3, March, Septem-

ber & December 1970.

6. "Deutscher Alpenverein. Mit-

teilungen", Jahrgang 22, Heft

6, November/December 1970.

7. "The Journal of the Moun-

tain Club of South Africa",

No. 72, 1969.

8. "Österreichische Alpenzei-

tung", Jahrgang 88, Folge

1374, November/December 1970.

9. "Panorama of Slovakia", 1970

—9.

10. "Rivista Mensile", Anno 91,

No. 11, November 1970.

11. "Verkehrsbuch", 42 Ausgabe,

Winter 1970—71.

The Others

1. "Zentralstatuten des Schwei-

zer Alpen-Clubs"

2. "Skiing of Slovakia"

3. "Vyske Tatry"

洋書受入報告

松方三郎氏寄贈

1. Eric Shipton "That Untra-

velled World". Hodder &

Stoughton, 1969.

会務報告

三月理事評議員会

(午後六時本会ルーム)

△出席者 吉沢、深田副会長、藤井

山崎、大森、小倉、宮下、松永、中島

野上、熊谷各理事、高山、織田、中田

金坂、堀田、渡辺各評議員、小原監

事

△議事

・エベレスト国際隊の件 (藤井)

毎日朝およびデイレンファース隊長

を連絡、会談の上本会として植村、伊

藤二隊員を派遣することに正式決定し

た。二人は二月十四日羽田を出発した。

・来年度役員 の件 (藤井)

三月二十五日臨時理事評議員会を開

き最終決定したい。

・四十六年度事業計画の件 (山崎)

高所登山技術研究会を追加、その他

は原案通り決定

・四十五年度事業報告の件 (山崎)

八月の大エベレスト展を追加、その

他は原案通り決定

・なお本年六月五日、六日上高地で行

なわれる恒例のウェストン祭はことし

で二十五周年を迎えるので本部、信濃

支部共催として、本部としても準備に

本腰を入れることにする。また神河内

山荘の改築については早急に具体案を

まとめ、松本営林署と交渉することに

する。

△報告

・日山協の件 (宮下)

オリンピック種目以外のラグビー、

相撲などともJOCに山岳も(日本

オリンピック委員会)の傘下にはいり

選手強化費もJOCから支給されるこ

とになった。

・山岳の件 (中島)

索引を目下製作している。山岳六十

五年の発行は若干遅れる。

・日山協遭対研修会の件 (金坂)

二月二十日八王子セミナー・ハウス

で開かれた日山協遭対研究会に出席し

講演した。

・在ネパール日本大使館登山世話係

りの件 (小原)

会報の広告などで六名応募者があり

外務省側とともに書面審査をやり、面

接して最終決定し。

・チエロスロバキア山岳会主催国

際山岳連盟青年部会の件 (吉沢)

会報三〇九号で発表した通り参加希

望者は本会あて申し込んでもらいた

い。

大学ヒマラヤ登山隊報告
(ダウラギリ主峰八一六七
m) 講師 今成征三
二月中来室者 二八九名

第二回現地支部長 会議開催案内

昨年七月第一回現地支部長会議が越後支部担当で佐渡において行なわれましたが、昭和四十六年度は宮城支部担当で国定公園栗駒山地域で支部長会議並に記念山行を行ないます。

支部長会議とはいうものの他に山行を通じて会員相互の親睦をはかる点にも大きい意義と成果を期待されているところから、全国各地から広くかつ多数の会員のご参加を待ち望んでいる次第です。

五月下旬の栗駒山は残雪と新緑の折りなす春山風情に加え、ハシリの山菜やイワナなども味わって頂けるものと思います。初日のひる頃仙台市の博物館にお集りねがい、バスで駒ノ湯温泉に向います。駒ノ湯は標高七〇〇m付近三迫川の谷に沿う簡素な温泉場です。翌日は一、三〇〇m地点まで(約二十分)を利用、そこから並足で約一時間半で山頂(標高一、六二九m)に達します。山頂はおおむね宮城、岩手、秋田の三県にまたがり「みちのくの山なみ」の展望をほしきままにしており

ルーム日誌(46年2月)

3日(水) 理事評議員会
4日(木) 財務委員会
10日(水) エベレスト国際隊記者会見
海外連絡委員会
17日(水) 常務理事会
18日(木) 図書委員会
24日(水) 第二六八回小集会 同志社

物を味って頂く積りですが、この日も二時間足らずの徒歩距離になると思われ

います。いずれにしても「みちのくの素朴」を味わっていただくというのが趣向でありますので多くの方々のご参加をお待ちしています。詳細については参加申込の方々に別途お送りする予定です。行事前後に付近の山行、または視察、見学等のため宿泊を予定される方は早めにご連絡下さい。

(宮城支部長 伊達篤郎)

第二回現地 支部長会議 実施要項

▽期日 昭和46年5月22日(土)―24日(月)
▽会場 栗駒山山麓駒ノ湯温泉(宮城県栗原郡栗駒町駒ノ湯)
▽記念山行 駒ノ湯(泊)―栗駒山頂―湯浜―鬼首―鳴子温泉(夕刻解散)
▽会費 四五〇〇円(仙台集合、鳴子解散まで)
▽予定コース

・第一日 5月22日(土) 集合場所 仙台市博物館(仙台市川内三ノ丸) 電0222-2512557

受付時間 午前11時30分―12時30分 仙台発 1時(貸切りバス)―栗駒町―駒ノ湯5時。会議5時30分―6時。9時30分から懇親会

・第二日 5月23日 駒ノ湯発8時―栗駒山11時―12時―湯浜温泉4時30分(泊)

・第三日 5月24日 湯浜発8時―岩入、鬼首見学後鳴子駅着4時 解散。

▽申込先 仙台市川内三の丸跡仙台博物館内 宮城支部長 伊達篤郎宛

▽締切り 昭和46年4月30日まで必着
なお詳細は参加申込みの方に別途通知します。

佐藤永年会員の近況

本年度をもって在籍五十年に達した会員は会員番号七四四番神谷恭、七五一番佐藤隆太郎の両氏である。神谷恭氏には昨年十二月十二日の年次晩餐会の席上、三田会長より永年会員章が贈られたが佐藤隆太郎氏は老令足許不如意のため残念ながら出席できまじとの連絡があり欠席されたので十二月二十日、神原理事と松田君が見舞がたにお訪ねして永年会員章をお届けしてまいりました。佐藤氏は思ったより元気です五十年前の入会当時の思い出、徳本峠での三田会長との邂逅、親友ビスマス氏(ヒマラヤンクラブで、エディターをつとめた植物学者で北大に留学したことがあり、昨年十二月二十九日に亡くなられた)の想いで等をなつかしく語られ、三田会長はじめ会員各位によりしくとのことでした。(松田)

シエルパの学校からの礼状

エベレスト登山隊は、エベレスト登山の帰路、シエルパの出身地の村にヒラリーが建設した学校の生徒達に、文具類とサッカーボール、野球道具等のスポーツ用品一式を寄贈してきた。

寄贈した学校は、Thami, Khumjung, Chauni-Kharla, Nanchu-Bazarの四校であり、それぞれの学校から礼状が届いているが、その中の一つはシエルパの学校の生徒達からは、

礼状と共に、貰った色鉛筆で書いた、楽しい八葉の絵が送られてきた。

絵の中には、イエティ、ヤク、クムジンの学校、チョルテン、オレンジの木、ヘリコプタ、花、ルクラの飛行場とホテル、エベレストのベース・キャンプの風景、スキー滑降等、多彩にわたることに楽しいものであった。

なお、礼状には「近くシエルバの村で一年の中で最大のお祭であるドムジュのお祭がやってきます。このお祭には、多くの人達が仮面をかぶって、音楽に合わせてダンスをし、チャンやロキシーを飲んで楽しいときをすごします」とお祭りを楽しみにしているとも記されていました。日本の小学生の絵も、送ってあげたいものです。学校の住所は左記の通りです。

Khumjung N.E. School, P.O.
Namche Bazar, East No. 3,
Nepal.
c/o. Khunde Hospital, P.O. Box
242, Kathmandu, (松田)

第二六八回小集会

第二六八回小集会は二月二十四日午後六時から本会ルームで同志社大学ダウラギリ主峰登頂報告会を行ない、今成征三、川田哲二、和田豊司隊員からそれぞれ概要の報告があった。出席者五十八名

第二六九回小集会

第二六九回小集会は三月十日午後六時から向井ビル四階会議室で大阪大学ビーク29登頂報告会を行ない、住吉仙也登攀隊長からの登攀報告があった。出席者六十名

第七回秩父宮記念学術賞

第七回秩父宮記念学術賞は第九次南極地域観測越冬隊内陸調査旅行隊の南極点往復内陸調査の業績に対して贈られることになり、三月九日午後三時から丸ノ内銀行クラブで授賞式が行なわれた。

授賞式には秩父宮妃殿下もおでましになり、茅日本学術振興会々長から内陸調査旅行隊の村山雅美隊長に賞状が授与された。式後祝賀パーティが開かれ、本会から模選考委員、武田、藤島名誉会員、三田会長、吉沢副会長、藤

井、辰沼、丹部、小原、村井、田口、成瀬、島田、山崎ら各役員が出席した。授賞した内陸調査隊員は次の通り。

▽村山雅美、藤原健蔵、柿沼清一、江原庸夫、矢内桂三、小林昭男、土屋貴俊、細谷昌之、山本利一、西部暢一、川崎敏。

登山技術講習会のお知らせ

指導研究委員会

新緑と残雪の富士山で左記の通り初中級者を対象にした登山技術講習会を開催します。希望者は本会事務局まで御連絡ください。申し込み用紙をお送りします。

▽場所 富士山五合目お庭小屋
▽日時 五月二十九日―六月一日
▽人員 三十名

深田副会長急逝 本会副会長深田久弥氏は三月二十一日茅ヶ岳登山中脳いつ血のため死去された。三月二十三日永福町本願寺別院で葬儀が行なわれた。謹んで哀悼の意を表する。

会員総会日時変更 四十六年度会員総会は四月十七日行なう予定のところ、都合により四月二十四日午後二時と変更になった。支部長会議も二十五日と変更された。

あとがき 深田副会長の死去に際して会員各位から種々御配慮をいただいたことを御礼申し上げます。(山崎)

昭和四十六年四月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二二 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号~300号) 金 700 円也
送 料 別 受 け 金 120 円也

ナカバヤシ株式会社

東京店・文京区水道2-15、電話 (943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7、電話 (352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1-15、電話 (731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部 (専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の 844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河

加藤泰安著

＜A5判482頁＞定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

＜四六判400頁＞定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

＜B6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・蔵山

川崎精雄著

＜A5変型判340頁＞定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

＜B5判206頁＞定価2,800円

40年のキャリアをもつ編集と内容。

赤いカバーでおなじみの……………

山日記 1971年版

日本山岳会編

＜A6判400頁＞定価750円

山岳

日本山岳会編

＜A5判＞

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

61年 1,800円

60年 1,500円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A5判リング綴り＞定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

＜B6判202頁＞定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

＜A6判126頁＞1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

＜菊判584頁＞定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A変型208頁＞定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

＜A12取変型判170頁＞定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

＜A5判350頁＞定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

＜B5変型判220頁＞定価3,000円

南極新聞1956～7年

南極研究会編

＜B5判横トジ＞定価600円

登山・スキー用具専門店

●買い易い

山の店

山の店

●北へ来たら

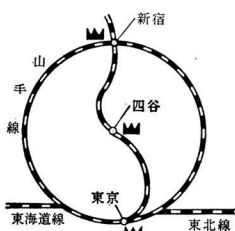
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな

山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がいい
けれど、どうせも
要するものがある。
なにしろ人間ですかり
として、登山ですかり
として、

どうしても必要なもの
をここにそろえてみる
主責任は、もっています

かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

